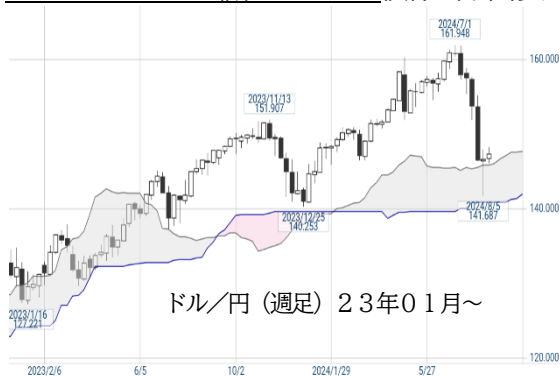


■ しばらくは株価睨みの展開が続く！？

依然として、ドル/円は一目均衡表の週足「雲」上限の水準（現在、145.82円）が下値サポートとして意識されている模様（下図参照）。先週の週足ロウソクは長い下ヒゲを週足「雲」



の中に潜り込ませる形となり、終値は「雲」の上方まで値を戻す動きとなった。また、今のところ今週の週足ロウソクは「雲」上限を下抜ける動きを見せていない。

その一方で、この1週間は148円に強い上値抵抗を感じる展開が続いている。それもそのはず、最新の米物価指標はいずれもインフレ鈍化傾向を示すものとなっており、米連邦準備理事会（FRB）が9月17-18日の米連邦公開市場委員会（FOMC）において利下げに踏み切ることは、もはや市場で確実視されている。一頃は「一気に0.5%ポイントの利下げもあり得る」と見る向きもあったが、そうした見方は徐々に後退してきた。

大幅利下げ観測は米国経済がリセッションに陥りかねないとの懸念から生じていたが、ここにきてNYダウ平均が4万ドル台を回復するなど、主要な米株価指数が総じて持ち直してきていることで、徐々に景気後退局面入りへの懸念も緩んできているようである。なにしろS&P500種の昨日（14日）の高値は、7月16日高値から8月5日安値までの急落に対する61.8%戻しの水準にまで大きく持ち直しているのである。

そして、今後も株価睨みの展開はしばらく続くものと見ておきたい。

なかでも特に注目度が高いのは、やはり今月28日に予定される半導体大手エヌビディアの5-7月決算であろう。半導体受託製造の台湾TSMCが先週9日に発表した7月の月次売上高が前年同月比44.7%増の2569億台湾ドルと単月の過去最高を更新したこともあり、市場ではエヌビディアの決算に対する期待が高まっている。

エヌビディアの5-7月期の売上高に関しては、市場から「前年同期比で2倍以上に膨らむ」との予想も聞かれ、それだけ期待が大きいからこそ逆に「好決算でも低評価」となる懸念もないではない。仮に、エヌビディアの決算を受けて米テック株が全体に弱含みの展開となった場合は、あらためて米景気後退懸念が一時的にも再燃し、金融市場全体にリスクオフのムードが広がる可能性もあり、兎にも角にも同社の決算に対する市場の反応には今から注目しておきたい。

なお、エヌビディアの決算発表の前には、注目の「ジャクソンホール会議」（来週22日-24日）も控えている。9月の米利下げが確実視されていることは周知のこととして、目下の市場はFRBがどの程度のペースで追加利下げに踏み切るかに関心を強めている。

その点について直接的な言及はなされない可能性が高いものの、米労働市場の情勢についてどのような見解が示されるかという点はやはり気になるところ。前回も述べたように、7月の米雇用統計の結果については、やはり巨大ハリケーンの影響を考慮する必要がある。言うまでもなく、雇用の安定はFRBが担う責務の一つであり、その先行きを楽観視しているか否かを諮ることが今は極めて重要と思われる。

市場からは、ユーロ/ドルが強含みで推移していることをして「FRBは今後数カ月の間に欧州中央銀行（ECB）よりも大幅に金利を引き上げるのではないか」との声も聞かれる。当面は、ユーロ/ドルが昨年12月高値=1.1140ドルを試し動きとなるかどうかという点も見逃せないものと心得ておきたい。

(08月15日 10:45)